

文房四宝

資料提供
(株)小津商店

【第十回】「紙の選び方と特徴」

◇はじめに

書道において欠かすことのできない文房四宝(筆・墨・硯・紙など)について、基本的な知識を中心に連載しています。第五回(令和六年八月号)では、紙の普及の歴史および、伝統的な製造方法を解説しました。今回は、作品を書く時の紙の選び方とその特徴について述べます。

◆紙の選び方

紙選びは難しい……紙には多くの種類があり、自分にあったものを見つけるのは大変な苦勞です。今回は、その悩みを少しでも解消できるように書道で使われる紙について解説いたします。

■紙を選ぶ際の心得

書道で使われることの多いのはやはり半紙です。学校の授業で使われるので、筆で字を書く機会があれば、誰もが一度は使ったことのある、もっとも一般的な書道用紙です。

皆さまはこの半紙を、何を基準にして選んでいますか？ 白いものや厚いもの、安いものな

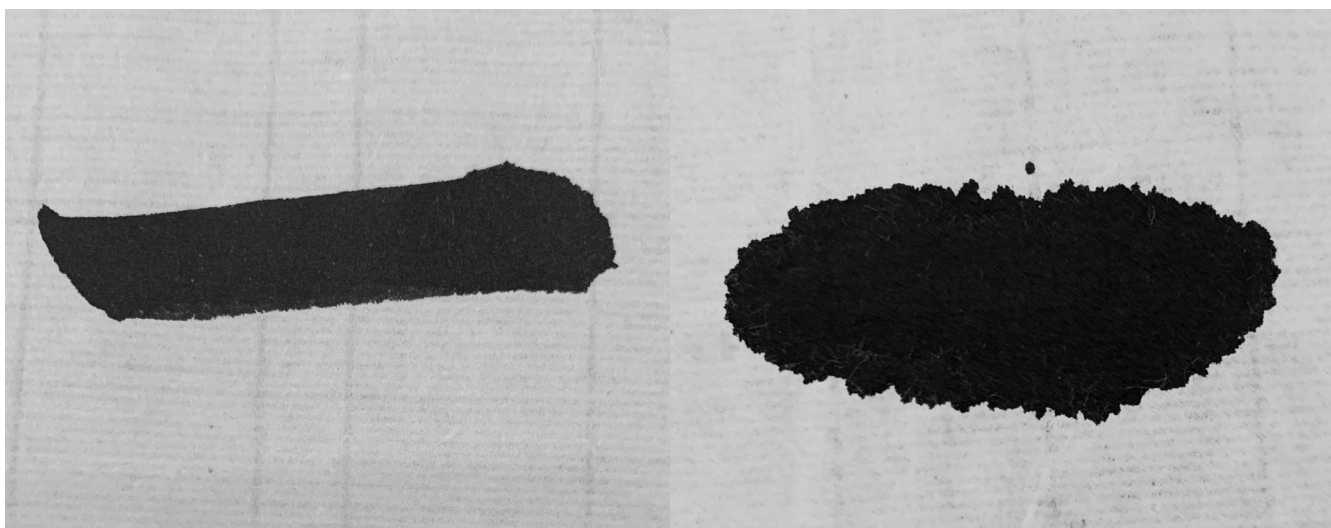
ど、選ぶ理由はさまざまだと思いますが、重要なのは「何を書くのか」と「どう書きたいのか」を事前に決めておくことです。

紙は、書く字にあわせて選ぶことができます。具体的には「滲む紙」と「滲まない紙」に大きく分かれ、漢字は前者、仮名は後者の紙に書くことが一般的です。書道用紙の選定は、「滲む」か「滲まない」かを基準に決めることがもっとも簡単な方法といえるでしょう(写真1)。

◆紙の特徴

■漢字向けの紙の特徴

墨で文字を書くと紙に吸収され、墨がじんわ



【写真1】 滲むか滲まないか、何を書くかを基準に紙を選ぶ

りと紙面に広がっていきます。この広がり、紙の厚みや墨の濃さ、紙の原料によって変わりますが、漢字向けの紙は多かれ少なかれ、滲むものがほとんどです。

漢字を書く時は筆に墨をたっぷり含めて書くことが多いため、漢字向けの紙は厚手のものが中心です。また、墨をたくさん吸い込んでも破れず、ゆったり書けるように作られています。

滲む紙は墨が紙の中に入る（くい込む）ことで黒々と発色し、また、濃淡が出やすくなります。さらに、墨の濃淡によって紙本来の美しさも際立ちます。まずは、滲むことを恐れずに、とにかく「書いてみる」ことが重要です。滲みを美しいと感じられると、書道の感性が磨かれてきた証拠です（写真2）。



【写真2】 基線のまわりに美しい滲みが広がる

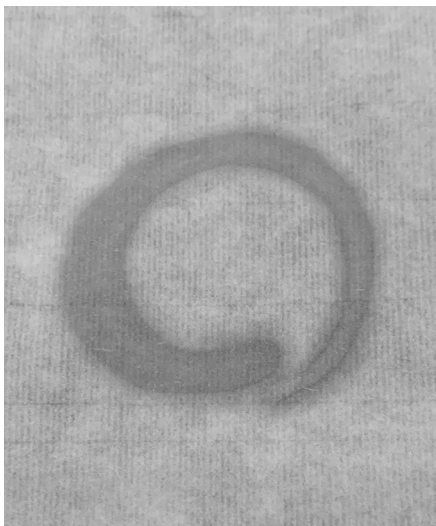
また、漢字向けの紙の中には淡墨（薄い墨）に適した紙があります。このタイプの紙は、通常よりもさらに滲むように調整されており、白く薄く、かつ繊細に作られています（写真3）。

こうした紙は破れやすいのが難点ですが、黒々と力強い墨の表現とは別の、淡く優しい雰囲気、を紙面上で表現することができます。墨と紙の面白さと紙本来の美しさをより楽しめるのが淡墨向きの紙の魅力であり、特徴といえます。

■漢字の紙の原料

ここでは滲みの出る代表的な書道用紙「画仙紙※」を解説します。

主な産地は日本では山梨（甲州）、鳥取（因州）、愛媛（伊予）、福井（越前）、海外では中国、台湾、韓国などが挙げられます。原料は、楮、三椏、雁皮、竹などの樹皮繊維にパルプ



【写真3】 淡墨を優しく表現する

や稲藁、古紙などを混合して作られています。

配合は産地や工房でそれぞれ違いがありますが、長年職人が試行錯誤しておりますのでただ滲むのではなく、墨が美しく広がり墨色のよい紙質で作られています。

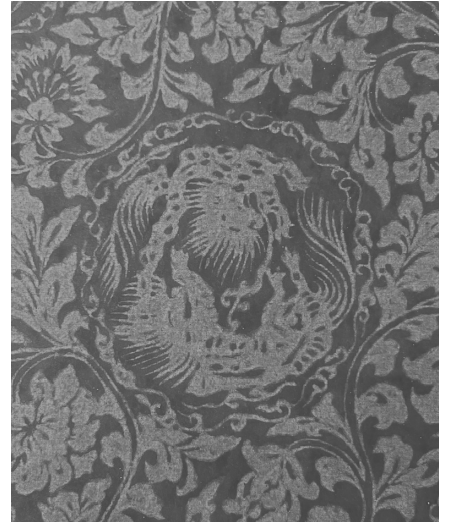
※一般的に書道や水墨画に使う紙の総称。サイズや種類も豊富にある。

■仮名向けの紙の特徴

仮名向けの紙は、書く文字や内容、イメージ、季節、書き手の好みなど、さまざまな要望を叶えるために非常に種類が豊富で、選定が難しくもあり、そこが楽しさでもあります。

しなやかな線で繊細な動きを表現する仮名向けの紙は、漢字向けの紙とは対照的に墨が吸収されにくく滲みが出ない、または出にくいように作られています。仮名の魅力は、余白や空間を重視して雅で趣を感じられる、日本的な美しさを表現できることにあります。滲みが少ない紙に書くと筆で表現した文字そのままが紙面になるため、仮名作品の制作はまさに腕の見せどころといえるでしょう。

また、前述したように滲み止めの加工が施されているのが仮名向けの紙の特徴ですが、滲み止めの加工には多くの種類があります。滲み止めとはいっても、綺麗な色で染めたり、金や銀



【写真4】花柄などを写し出す唐紙

が振られた豪華で華やかな加工法など、多彩な技法が存在します。このように加工された用紙は「料紙」といわれています。

■代表的な料紙加工の技法と模様

・ドーサ引き

料紙加工の最初の工程です。紙の滲み止めとともに強度を増すために行い、その後の加工をやりやすくするための工程です。膠にかわに明礬みょうばんを混ぜたものを生紙なまがみに引き（塗り）ます。なるべく薄く、均一に塗り重ねることが重要です。

・浸け染め

一般的な料紙の染め方で、紙を染料に浸し、くぐらせて染色する技法です。濃く染めたい場合は、何度も繰り返し返して染色します。

・引き染め

「刷毛染め」とも呼ばれています。染料を刷毛



【写真5】天然の猪いのししの牙でこする

に含ませて紙に塗る技法です。略式の加工法ですが、むらが出ないように染めるのはかなりの技術を要します。

・ぼかし染め

刷毛またはたんぼを使い徐々に色の濃淡をつける技法です。刷毛を使うと直線的、たんぼを使うと丸みのあるぼかし染めに仕上がります。

・具引き

胡粉こふん（貝殻を焼いて作った白い粉）を膠で溶き、刷毛で紙の表面に引きます。また、この液に染料を混ぜると色具引きができます。具引きは、染めとは異なり紙の中まで染まるわけではなく、紙の表面のみを覆う加工です。

・雲母引き

ドーサ引きを施した紙の上に雲母（火成岩石に含まれる鉱物。うんも、ぎらとも呼ぶ）の粉末を落として紙面全体に塗ります。キラキラと



【写真6】墨の流れを模様とする

輝いて見える効果があり「高野切こうやぎれ」や「小島切こしまぎれ」などの紙ではこの技法が用いられています。

・唐紙からみ（写真4）

雲母を布海苔ふのりで溶いた液をたんぼで版木に塗り、具引きした紙面を当て裏からバレンで刷り、模様を紙に写し出します。

・空摺りからず

唐紙と同様に、版木に具引きした紙を載せて刷り出す技法です。空摺りは紙の裏面を版木に当てるのがポイントです。具引いた面を猪牙ちよき（写真5）でこすり、模様を浮き出させます。光沢のある柄が出る技法です。

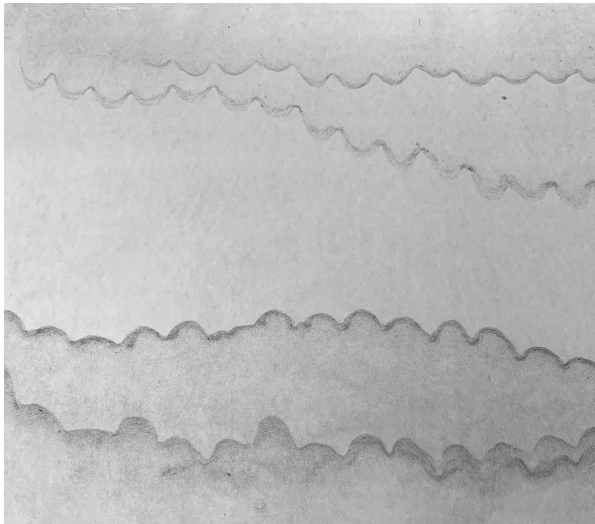
・墨流し（写真6）

伝統的な模様技法の一つです。墨液を水面に落とし、その水流を模様として紙に写しとる技法になります。墨の流れと仮名の文字が調和して、より流麗さを表現できます。

また、他色で行う場合もあり、この技法の源流はヨーロッパのマープリングや中国の班紋紙ともいわれています。今なお、モタンでお洒落な模様です。

・雲紙くもがみ（打雲紙）（写真7）

平安時代から続く伝統のある模様技法です。鳥の子紙（雁皮と楮を混ぜて漉いた紙）の上下に、色付きの紙料を雲が流れるように漉きかけて模様を作ります。雲の色は初期は青（藍）や紫など、単色で作られていましたが、徐々に上が青（藍）、下が紫などの趣向もみられるようになりまし。この模様技法は色紙や短冊などさまざまな紙で用いられているので、目にする機会は多いと思います。

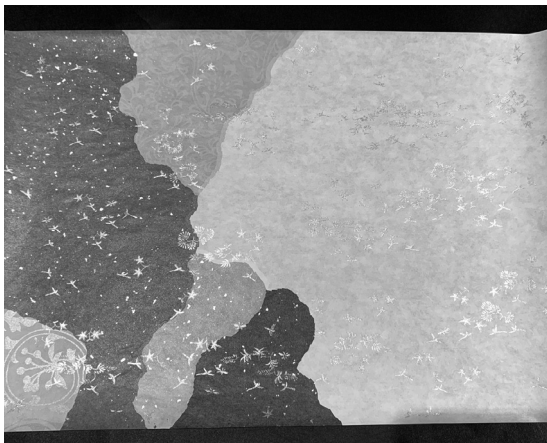


【写真7】平安時代から続く伝統的な模様技法

・切り継ぎ、破り継ぎ、重ね継ぎ（写真8）
染め紙や唐紙などの料紙を「切る・破る・重ねる」ことで継ぎ合わせて新たに料紙（継ぎ紙）を作る、平安時代に生まれた技法です。この技法で作られた紙は「料紙の最高峰」といわれ、平安の世を表したような美しさ、流麗さ、豪華さが紙の中に敷き詰められています。

■仮名の紙の原料

漢字向けの画仙紙の原料とほぼ同様ですが、三極や雁皮など元々滲みにくいとされる原料が多く含まれています。さらに藁やパルプと「サイズ剤※」を加え滲み止めを施して作られます。※滲み止めの効果があり、この溶剤を水中に入れて紙を漉く。



【写真8】日本最古の和紙工芸といわれる継ぎ紙

ここまで紙の選び方とその特徴について概略を述べましたが、あくまで作品作りの参考とされて、最終的には画仙紙や料紙、手漉き和紙など用紙の種類にかかわらず、自分が気に入った紙に書くことをおすすめします。今回述べたように産地や製法、価格など、多彩な紙があります。ぜひ店頭で直接用途や好みに応じた用紙を探してください。書きやすく、何より好きな紙が見つければ紙選びは成功したといえます。文字によっては向き不向きもありますが、まずは自分で選んで書いてみましょう。ぜひ、諦めずに自分に合った紙を探して、楽しく充実した書道生活をお送りください。次回は紙のサイズや保存方法などを述べたいと思います。

【参考文献】

- ・久米康生著『和紙文化辞典』わがみ堂、1995年
- ・日本放送協会編『書道に親しむ 漢字』講師 鈴木桐華、NHK出版、1994年
- ・日本放送協会編『いろはに学ぶ書心の美』NHK出版、1998年
- ・『季刊和紙 No.16』全国手すき和紙連合会、1998年
- ・『和紙の手帖』わがみ堂、2014年
- ・『岡本光平の文字を楽しむ書』NHK出版、2003年